修士論文（要旨）
2009 年 1 月

# 高齢期の愛着に関する心理学的研究

指導　長田久雄　教授

国際学研究科
老年学専攻

20641610
滋　野　　淳

目　　次

Ⅰ．緒言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1．愛着（attachment）とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2．愛着スタイル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
3．安全基地(secure base)とは ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
4．内的作業モデル(Internal Working Model)とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
5．愛着スタイルの測定方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
6．愛着対象に対する２つの立場　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅱ．研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

Ⅲ．操作的定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

Ⅳ．方　法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
1．回答者と実施方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
2．調査内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

Ⅴ．結　果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
1．高齢期における愛着スタイルの分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
2．高齢期における安全基地となる愛着対象とは誰か・・・・・・・・・・・・・・・・・10
3．高齢期におけるストレスフルな要因と愛着スタイルの分布との関係 ・・・・・・11
4．高齢期における愛着スタイルと心理的適応との関連 ・・・・・・・・・・・・・・11

Ⅵ．考　察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

Ⅶ．本研究の限界と課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

Ⅷ．謝辞 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

引用文献
資料

## Ⅰ．緒言

Bowlby（1969）は，個体がある特定の対象と結ぶ情愛的な絆を「愛着（attachment)」と名付けた.幼児期以降の愛着の発達を説明する為に,愛着の心的ルールとして内的作業モデル（Internal Working Model）を仮定した.

## Ⅱ．研究目的

これまで,高齢期の愛着について日本国内では未だ実証的研究がなされていない.そこで本研究では，次の 4 点を明らかにすることを目的とした．1.高齢期における愛着スタイルの分布について明らかにする．2.高齢期の安全基地となる愛着対象について明らかにする．3.高齢期における愛着スタイルの分布とストレスに関する要因との関係について明らかにする．4.高齢期における愛着スタイルと心理的適応との関連について明らかにする.

## Ⅲ．方　法

**1．回答者と実施方法**　調査は留置法により実施した．2008 年 2 月上旬に，埼玉県内で開催されたいきがい大学の受講生 123 名を対象に,講義開始前の時間を利用し質問紙を配布し,後日 109 名から回収した（平均年齢 64.8 歳　SD=3.28　性別不明：10 名）.

## Ⅴ．結　果

**1．高齢期における愛着スタイルの分布**　高齢期における愛着スタイルの分布を明らかにするために,ECR 日本語版の各下位因子「見捨てられ不安」「親密性の回避」の合計得点を算出し,各下位因子の平均値からの高低により分類を行なった.

その結果，secure type が最も多く,続いて fearful type ,dismissing type，preoccupied type，fearful type の順であった．男女別では secure type が最も多く,fearful type，dismissing type，preoccupied type の順であった.年齢の高低別では,65 歳未満では secure type が最も多く,fearful type，preoccupied type，dismissing type の順であった.65 歳以上では,secure type が最も多く,fearful type，dismissing type，preoccupied type の順であった.

**2．高齢期における安全基地となる愛着対象とは誰か**　高齢期の安全基地となる愛着対象を明らかにするために，ECR 日本語版に回答する際に，家族を含め，普段最も親密だと感じている他者について,その続柄の回答を求めた.その結果,男女とも,配偶者が最も多く,続いて友人,子どもの順であった.年齢別でも,配偶者が最も多く,友人,子ども,兄弟･姉妹,職場の人の順であった.

**3．高齢期における愛着スタイルの分布とストレスに関する要因との関係**　愛着スタイルの分布とストレスに関する要因に関係があるかを検討するために,同居人数の多少,死別経験の有無,収入を伴う仕事の有無,収入を伴う仕事以外の活動の有無,健康度自己評価の良悪,について $\chi^2$ 検定を実施したところ,すべてにおいて有意な差は認められなかった.

**4．高齢期における愛着スタイルと心理的適応との関連**　愛着スタイルと心理的適応との関連を検討するために,愛着スタイル 4 分類を独立変数とし,心理的適応に関係する要因を従属変数とする一元配置の分散分析を実施した.その結果,全体では GDS 得点において,愛着スタイル 4 分類の主効果が有意であった（$F(3,70)=4.67$，$p<.01$）.Tukey の多重比較を行った結果,fearful type が secure type よりも有意に高かった.また LSIK の下位因子である心理的安定において,愛着スタイルの 4 分類の主効果が有意であった（$F(3,76)=3.38$，$p<.05$）.Tukey の多重比較を行った結果,secure type が preoccupied type よりも有意に高かった.

引用文献

Ainsworth,M.D.S,M.C., Waters,E.,&Wall,S 1978 :Patterns of attachment; A psychological study of strange situation. Hillsdale, NJ:Lawrence Erlbaum Associates,Inc.

Bowlby,J. 1969：Attachment and Loss;Vol.1 Attachment. New York:Basic Books.

Bowlby,J. 1973 ： Attachment and Loss;Vol.2 Separation: Anxiety and anger New York:Basic Books.

Bowlby,J. 1980 ： Attachment and Loss;Vol.3 Loss: Sadness and depression New York:Basic Books.

Brennan, K.A., Clark, C.L., & Shaver, P.R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: An integratibe overview. In J.A. Simpson & W.S. Rholes(Eds.), Attachment theory and close relationships. New York: Guilford Press.0 Pp.46-76.

小塩真司 2004 SPSS と Amos による心理・調査データ解析 因子分析・共分散構造分析まで 東京図書

小塩真司 2005 研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析 東京図書

数井みゆき・遠藤利彦 2005 アタッチメント 生涯にわたる絆 初版 ミネルヴァ書房

加藤和生 1998 Bartholomew らの 4 分類愛着スタイル尺度（RQ）の日本語版の作成 認知体験過程研究, 7, 41-50.

久保田まり 1995 アタッチメントの研究 内的ワーキング・モデルの形成と発達 第 2 版, 川島書店.